京都産業大学 経営学部 推薦図書リスト

このリストは、経営学部の教員が学部生（主に１・２回生を想定）にお勧めする図書の一覧をまとめたものです。経営・会計・経済分野の図書が中心ですが、それ以外の多様なジャンルの図書も含まれています。

全ての図書は本学図書館に所蔵されており、ごく一部を除き、３階の「経営学部の学びのコーナー」に展示されています。教員の推薦コメントを読み、面白そうな本があれば、図書館に行ってぜひ一度手に取ってみてください。そして読んで得た知識を、ゼミや講義での学びにどんどん活用してみてください。

経営学部 教員一同

１．安部 悦生編著『グローバル企業：国際化・グローバル化の歴史的展望』（文眞堂）

大企業はもとより、中堅・中小企業も持続的成長のためにはグローバル化は不可避である。とはいえ、ただただ海外に出ていくだけでは大火傷するのが関の山であろう。成功事例をベンチマークすることが不可欠である。本書はアップルをはじめ、ユニリーバ、ＧＥ、任天堂やソニー、キッコーマン、岩塚製菓と旺旺集団（中国を代表する食品グループ）のケースが取り上げられている。経営史的アプローチのオモシロさも体得できる作品でもある。（松本）

２．新井 紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）

AI は、急速に我々の日常生活に浸透し始めており、人間に代わって AI に仕事をさせる企業も出現している。今後、AI は労働力として、我々のライバルになる可能性が高いといわれる。本書では、人工知能プロジェクトに携わる数学者が、AI の実態を伝え、AI にできない仕事をする上で大切な「読解力」の問題について語っている。（古村）

３．アルフレッド・D・チャンドラーJr.『組織は戦略に従う』（ダイヤモンド社）

書名となっているチャーミングな定義を、アメリカの事業部制成立をめぐる４つの企業についての事例分析と多数の企業の情報を基に導き出した書物です。著者のチャンドラーはこの後、アメリカでのビッグ・ビジネス展開の意味、さらにビッグ・ビジネスの国際比較へ研究を広げていきますが、この本はその出発点となった研究であるとともに、この後の経営史や経営学の研究に大きな影響を与えた書物としても今なお読み継がれています。（柴）

4．アレクシス・トクヴィル『アメリカのデモクラシー（上）（下）』（岩波書店）

『アメリカのデモクラシー（上）（下）』（岩波文庫 2005 年 11 月 16 日）と『旧体制と革命』（ちくま学芸文庫 1998 年 1 月 1 日）この二冊はフランスの著述家アレクッス・トクヴィル著作である。アメリカ社会とフランス社会を比較研究した、優れた比較例証法であり、因果関係推論のお手本を提供している。（李）

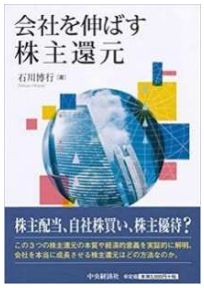
5．安藤 忠雄『連戦連敗』（東京大学出版会）

三条木屋町や北山にある、コンクリート打ちっぱなしの著者による建物をみたことがある人もいるかもしれない。著者は、独学で建築を勉強し、世界的にも有名な建築家となった人物。そんな人であっても、他の建築家とのコンペ（建築設計案の競争）で負けることは日常茶飯事であり、日々悪戦苦闘している様子を垣間見ることができて興味深い。スケッチや写真も多く、また文中の人物や単語についてすぐ横に解説があるのも読みやすい。（石光）

6．池上 彰『伝える力：「話す」「書く」「聞く」能力が仕事を変える！』（PHP 研究所）

卓越した「伝える力」を持つ池上彰氏の代表書籍。日常からビジネスにも活かせる内容。「伝える」には、「話す」「書く」そして「聞く」能力が必須。それらによって、仕事の成果が左右されることも往々にしてある。現代のビジネスパーソンに不可欠な能力といえる「伝える力」をどうやって磨き、高めていったらよいのか。伝えることの難しさを身をもって経験している著者が分かりやすく説明している。（松高）

7．石川 博行『会社を伸ばす株主還元』（中央経済社）



著者の石川博行氏（大阪市立大学教授）は、日経図書文化賞も受賞したわが国会計学のトップランナーの一人です。同氏は、一貫して現代企業における配当政策について研究を行い、本書では株式会社を伸ばす配当政策とは何かという問題について緻密な分析を行っています。株式会社と株主の関係を考える上で重要な視点を与えてくれる良書です。（橋本）

８．板倉 雄一郎『社長失格：ぼくの会社がつぶれた理由』（日経 BP）

脚光をあびたベンチャー企業が、倒産してしまう実話。ジェットコースターに乗っているような感じで上昇して落ちていく様が興味深く、ドラマを見ているような内容である。この栄枯盛衰の物語を通じて、経営学における様々なテーマを考えることができます。たとえば、「起業する経営者と組織をまとめる経営者の能力は異なるのか？」、「ベンチャー企業の資金調達のあり方はどうあるべきか？」、「出口戦略（自社を売却するのか、上場するのか）をどのようにすればよいのか？」、「収益モデルはどう設計するのか？」などです。少し難しい表現があるかもしれないですが、将来の進路において起業を志す人には必読の書だと思います。（久保）

９．伊丹 敬之『ビジネス現場で役立つ 経済を見る眼』（東洋経済新報社）

「経済学」というと、数学や数字を駆使する理論的な学問で、経営学部の勉強には関係ないと思っている人が多いと思うが、本書では、経済学にはカネやモノ、情報の動きだけでなく、ヒトの感情も大きく関わることを強調。また、ビジネス、企業経営も経済現象の一つであり、どんな仕事でも「経済を見る眼」は必要不可欠であるとしている。本書は、経営学を学ぶ学生が「経済を見る眼」を養うための、数式を使わない経済入門書である。（北原）

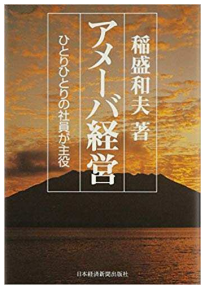
１０．伊丹 敬之・青木 康晴『現場が動き出す会計：人はなぜ測定されると行動を変えるのか』（日本経済新聞出版社）

現代社会において、なぜ、会計学が必要とされるのか、本書は、現代の企業や組織において、会計学が必要とされる理由を分かりやすく説明しています。本書を読めば、会計数値の背後にある考え方や判断を理解することができます。さらに、会計数値が、どのような局面で会計数値が実際に利用されるかを知ることができます。会計が得意な人も苦手な人も、経営学部生にとっての必読書です。（松下）

１１．伊藤 秀史『ひたすら読むエコノミクス』（有斐閣）

戦略、組織、会計に関する経営学でもおなじみのトピックスがコンパクトに経済学（ミクロ経済学・ゲーム理論）をベースにしながら、それでいて数式一切無しで理解ができる。優しい文章で、一つ一つ説明が丁寧で、身近な例を交えて説明してくれるので、タイトル通り、最後まで挫折せず「ひたすら」読み進めるだろう。（近藤）

１２．稲盛 和夫『アメーバ経営：ひとりひとりの社員が主役』（日本経済新聞出版社）



2010 年に経営破綻した JAL などを再生させ、また京セラの創業者でもある稲盛和夫氏がその独特の経営術について記した一冊である。その内容は、自身が京セラを創業してから経験したことを踏まえて考え出された「アメーバ経営」についてである。そこでは、経営哲学や組織づくり、採算管理などの手法が説明されており、管理者を目指す人は読んでもらいたい。なお、文庫版も出されています。（伊藤）

１３．稲盛 和夫『稲盛和夫の実学：経営と会計』（日本経済新聞出版社）

会計を勉強するとどんなことに役立つのですか？という質問をよくされる。その答えが書かれているのが本書である。自称、会計の素人であった著者が、起業し事業を拡大するなかで、会計の役割について自ら考え、経営活動に落とし込んでいく様子からは、会計の役割を実感することができる。会計は難しくて自分には理解できないと思う人もいるかもしれないが、当たり前でシンプルな考え方がもとになっていることが分かる。（石光）

１４．岩城 秀樹『Maxima で学ぶ経済・ファイナンス基礎数学』（共立出版）

ミクロ／マクロ経済学、管理会計、ファイナンス、保険などを学ぶ経済・経営系学部学生、および公認会計士、証券アナリスト試験などの資格試験受験のために必要な数学的知識を習得したい人を対象とした数学の入門書。本書では、数式処理ソフトウェア Maxima の操作を通じて数式に慣れ親しむことにより、数学に対するアレルギーを排除し、できる限り苦痛を伴わずに数学の基礎的知識を習得することを目指している。（岩城）

１５．岩田 巌『利潤計算原理』（同文舘出版）

財産法と損益法という言葉を聞いたことはありますか？これらは会計上の利益の計算方法として知られていますが、その背後には、計算構造論があります。計算構造論とは、会計上の利益や会計数値をどのような資料やデータから導き出すかを議論するものです。本書は計算構造論の傑作で、会計系の大学院を目指す人にとってはバイブルともいうべき本です。古典で少し難しいですが、会計理論を深く学習したい人は是非、読んで下さい。（松下）

１６．植田 和弘『緑のエネルギー原論』（岩波書店）

東日本大震災を境に、国民一人ひとりがエネルギーのあり方を考えなくてはならない時代が到来した。「原発は是か非か？」「再生可能エネルギーは信頼できるのか？」…世間はこうした問いであふれている。だが、今私たちに必要なのは「“こうした問いを考えるには何を考えなくてはいけないか”を学ぶ」、つまり“エネルギー原論”を学ぶことである、そしてそのカギを握るのは“持続可能な発展”という概念である――それが、本書のメッセージである。（宮永）

１７．上田 信行『プレイフル・シンキング』（宣伝会議）

この本は、同志社女子大学上田信行先生が提唱する「プレイフル」とは仕事や勉強をより楽しみながら学びを得る概念です。上田先生は、物事に対してワクワク・ドキドキする心の状態が「プレイフル」であり、働く人や学生が仕事や勉強を楽しみ、熱中する、チャレンジするためにはどうするか、提案しています。さとり世代と言われるネット世代の大学生にとっても、「なんかやってみよう！」と思える本です。（井村）

１８．植村 直己『青春を山に賭けて』（文藝春秋）

マッキンレー登山で帰らぬ人となった世界的冒険家・植村直己さんによる著書。愚直な、本当に素朴で愚直な植村さんですが、世界中の山に登りたい一心で、単身で世界に飛び出し、冒険を重ねていく姿に感動していました。私は冒険家にはなれませんでしたが、天才・秀才やエリートでなくても、一意専心で「事を為す」ことができることを学びました。（篠原）

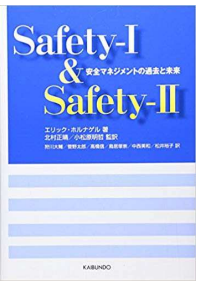
１９．エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』（東京創元社）

「自由ってなんだろう。孤独ってなんだろう。」という、結構、難解なテーマを社会心理学の立場から取り扱っている。けれど、いろいろ考えさせてくれる内容です。わからないことが多いけど、まぁ、そのうち（あきらめず読んでいるうちに）わかるようになってくる。付録の「性格と社会過程」をまず初めに読むことをお勧めします。（吉田）

２０．エミール・デュルケーム『自殺論』（中央公論社）

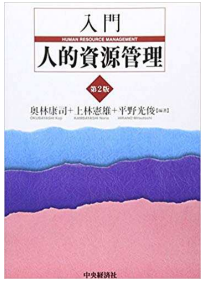
エミール・デュルケーム（著）／宮島喬（訳）『自殺論』（中公文庫 1985 年 9 月 10 日）という本は優れた数量研究である。統計データを用いて、自殺率の高低というは社会規範と統合力の強弱との関係を検証したフランスの社会学者エミール・デュルケームの著作である。（李）
（※左の書影は、中央公論新社版のもの）

２１．エリック・ホルナゲル『Safety-1 & Safety-2：安全マネジメントの過去と未来』（海文堂出版）



ミス防止・事故防止は、経営管理の課題とも言えます。アルバイト等の業務のなかで発生する身近なミス防止を図るうえで、どのような方法は不適切になるのか、また、望ましい方法とは何かを考えるうえでも、数々のヒントを得られるでしょう。（赤岡）

２２．奥林康司・上林憲雄・平野光俊『入門・人的資源管理』（中央経済社）



人的資源管理の要点と先進的な動向を学ぶことができます。（三輪）

２３．小倉 昌男『小倉昌男 経営学』（日経 BP）

本書はたぶん日本の経営者が書いた最高の経営の教科書です。小倉は、考えて考えて考え抜くことによって不可能と言われた一般家庭向けの宅急便のビジネスプランを構築します。その手並みの鮮やかなこと。しかし彼は単なる理詰めの経営者ではありません。小倉が人間の感情面に配慮し、社員のやる気を最高度に高め、机上のプランを実現していくプロセスこそ、本書のもう 1 つの読みどころなのです。（箕輪）

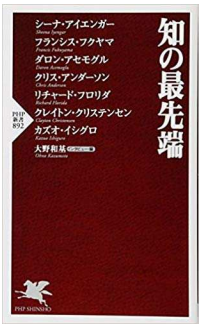
２４．カール・シャピロ、ハル・ヴァリアン『情報経済の鉄則：ネットワーク型経済を生き抜くための戦略ガイド』（日経 BP）

今を「デジタル経済」時代と呼ぶ。現在グーグルのチーフエコノミストである経済学者二人が、早くも 1990 年代末に、到来するデジタル経済時代の本質と重要な分析概念を解説した名著である。流行の時代に、流行りの書籍に飲まされず、デジタル経済時代を明確に理解するために、最も役に立つ貴重な一冊である。（具（承））

２５．カール・ポパー『開かれた社会とその敵』（未來社）

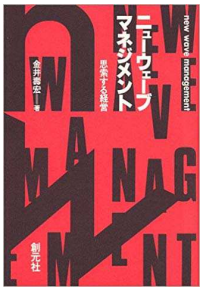
社会の現実に不正義や悪を見いだし、それを一気に解決する方法を模索した人たちがいた。古代ギリシアの哲人プラトンもそのひとりである。社会意識の高い、尊敬にあたいする人だ、と信じられている。しかし、カール・ポパーによれば、この人たちこそ自由と民主主義の敵であり、全体主義という「閉ざされた社会」を作りだした思想家にほかならないという。歴史の逆説に目を開かせる名著。（上野）

２６．カズオ・イシグロ、ダロン・アセモグル他『知の最先端』（PHP 研究所）



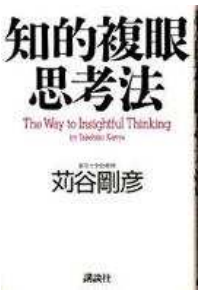
世界的に著名な作家や学者 7 人へのインタビュー集。薄い新書ですぐに読了できます。薄いとはいえ、内容はインタビュイーの専門に関連しており、異なるジャンルの専門家から出てくる様々な言葉は興味深いものがあります。たとえば、WIRED 誌の編集長だったクリス・アンダーソンによる「3D プリンタがもたらす製造業への影響」や「IT 企業」の話。ほかには、「イノベーションのジレンマ」の著者として有名なクレイトン・クリステンセンによる「日本企業のイノベーション能力の見解」や「人生訓」の話。この本を読めば、7 人の話し手のうち、誰かの話に興味を持てるのではないでしょうか。（久保）

２７．金井 壽宏『ニューウェーブ・マネジメント：思索する経営』（創元社）



マネジメントや組織についての全体像を 47 個のメガネから眺めてみようという本です。一つのトピックスが 5 ページ程度でわかりやすく紹介されていて、流し読みしながら自分がどんなことに関心があるかが自然とはっきりしてきます。さらに自分が当たり前と思っていることが実はそうでもないという気づきも与えてくれる不思議な入門書です。（佐々木）

２８．刈谷 剛彦『知的複眼思考法』（講談社）

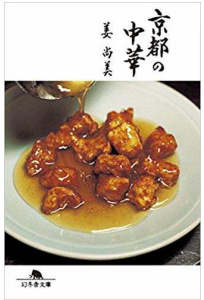


論理的思考法を学びたい人。クリティカルシンキングを身につけたい人。本書はそんな人に最適な入門書です。しかしいくら良いテキストがあっても、いくら良い先生がいても、それらは簡単に身につくものではありません。ですからとにかく本書と本気で格闘してください。一度ではなく、何度でも。そのたびにあなたの論理的思考力が向上していくはずです。（箕輪）

２９．神原 理『サービス・マーケティング概論』（ミネルヴァ書房）

先進国では７割以上がサービス業に就きます。「おもてなし」は日本が世界に誇る美徳の１つですが、その一方で顧客が過剰なサービスを求めたり、従業員にとって魅力のない職場になったり、企業としても利益を上げることが難しくなることもあります。飲食や保険、カフェやスポーツ・イベントなど、身近な事例を使いながら、サービス業の収益性を高める実践について学ぶことができます。（福冨）

３０．姜 尚美『京都の中華』（幻冬舎）



せっかく京都で大学生活を送るのだから、京都のあれこれにもぜひ詳しくなってください（京都人であっても、案外京都のことを知らないものです）。世に京都本は数多ありますが、この本はひと味もふた味も違います。京都の歴史と文化がどのように食に反映されるのか、これはグローバル経営やイノベーション・マネジメントにも通じる問いです。まずは一読、そしてできればいくつかの店に実際行ってみることをオススメします。（伊吹）

３１．小林 孝雄・芹田 敏夫『新・証券投資論 Ⅰ理論編』（日本経済新聞出版社）

証券投資論の本格テキストとして人気のロングセラーである。Ⅰ巻では、ポートフォリオ理論、CAPM、APT、オプション評価理論など証券の価格とリスク分析、および資産運用の最新理論体系を解説している。なお、本書は、証券アナリスト試験受験のための基本テキストとなっている。（岩城）

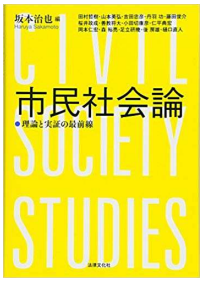
３２．児美川 孝一朗『キャリア教育のウソ』（筑摩書房）

小学生の頃から「夢は何ですか？」と何度も聞かれませんでしたか？大学に入れば「やりたいことは何ですか？」と聞かれる。「夢」や「やりたいこと」はないといけないのでしょうか？そんなに簡単に見つかるものでしょうか？人生 100 年時代、長い人生で自分のキャリアをどのように築いていくべきか、キャリア教育研究の第一人者である著者が、常識に振り回されずに自らの進路をつかみとる方法を語っています。（松高）

３３．三枝 匡『ザ・会社改造：340 人からグローバル 1 万人企業へ』（日本経済新聞出版社）

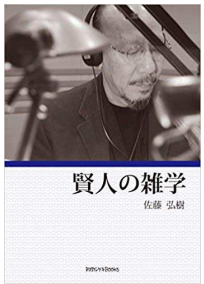
BtoB 企業であるミスミを田口社長から引き継ぎ、最後は売上高 2000 億のグローバル企業にまで成長発展させた主人公三枝匡が、自らの経営改革を物語風にまとめた本です。組織に戦略志向をどのように埋め込むか、動きの鈍い組織をどのように活性化させるか、人をどう選び育てるかなど、戦略をねり組織を作り人を動かす経営学のエッセンスが全て学べる本です。三枝匡氏の本はどれも文庫本になっていますがワクワクします。（佐々木）

３４．坂本 治也編著『市民社会論：理論と実証の最前線』（法律文化社）



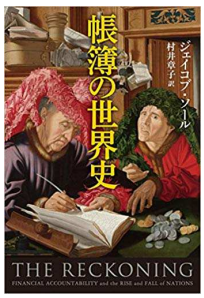
普段、私たちが何気なく使っている“市民社会”という言葉。だが、市民社会についていざ学習しようとすると、初学者では歯が立たない難解な書籍、あるいは「民主主義」「NPO・NGO」「ソーシャル・キャピタル」「ボランティア」といった個別テーマのみをフォーカスした書籍のいずれかしかない、という状況が続いていた。それを一変させたのが、本書の登場である。マネジメント・リテラシーＩで学んだ「社会思考のマネジメント（social management）」に興味を持った学生は、ぜひご一読を。（宮永）

３５．佐藤 弘樹『賢人の雑学』（ケイエスティープロダクション）



筆者は、長らくエフエム京都（α-station）でＤＪを務めるなど多方面に活躍されたものの、惜しまれつつ早逝された。珠玉のエッセー集である。英語について、異文化コミュニケーションについて、教育について、日本語について等々、深い学識と研ぎ澄まされた国際感覚が飾らない言葉をもって表現されている。最近はなかなかお目にかかれない「かっこいい大人」である。一晩お酒を飲みながら語り明かしてみたかったと思う次第である。（松本）

３６．ジェイコブ・ソール『帳簿の世界史』（文藝春秋）



簿記や会計と言えば数字だらけで無味乾燥なものと思っていませんか？それは大きな誤解です。皆さんが学修している複式簿記のシステムは、中世のイタリアに生まれ、世界各国で使われ続ける共通言語です。そして、大きな経済事件や偉業の裏には必ず帳簿（簿記や会計）がかかわっています。本書では、それらの出来事と簿記や会計の関りを、経済的にヘゲモニー（覇権）を取った国々を中心に平易な文章で解き明かしてくれます。歴史的に世の中を見る目を養いましょう。（橋本）

３７．渋沢研究会編『公益の追求者・渋沢栄一』（山川出版社）

このたび新１万円札の肖像に決まった渋沢栄一は、「日本資本主義の父」として知られているが、９１年の生涯で約５００社の企業の設立と経営に携わるとともに、６００以上の社会貢献活動（フィランソロピー）に関わった、日本の近代史上代表的な企業家および社会事業家である。「公益第一・私益第二」とのスタンスは現代的意義を有する。本書は、渋沢の多岐にわたる活動と足跡をコンパクトに叙述しており、渋沢の入門書として最適である。（松本）

３８．下和田 功『はじめて学ぶリスクと保険』（有斐閣）

改訂を繰り返し、長く大学の保険論、リスクマネジメント論の教科書として用いられてきたものである。伝統的な保険論を基礎としながら、情報の経済学やファイナンスなどの最新理論を取り入れるとともに、保険業法・年金関連法などの制度変遷も盛り込まれている。とくに、社会保障に多くの頁を割き、生活保障システムの一部を担うという、保険産業の社会的役割について論じている点が、特徴的である。（諏澤）

３９．ジャレド・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄（上）（下）：1 万 3000 年にわたる人類史の謎』（草思社）

『第 3 のチンパンジー』で有名な J.ダイヤモンド教授の体表作（ピューリッツァー賞、1998 年）。「なぜユーラシア大陸の諸文明がアメリカ大陸のそれらを駆逐し、逆ではあり得なかったのか？」という人類の世界史を貫く問いに答えるもの。答え探しの過程は、読者を 1 万 3000 年の人類の歴史への旅をさせ、知の連鎖と迫力を経験させてくれる。多様な側面からの因果関係を探る過程は実にビックスケールで、我々をわくわくさせる。（具（承））

４０．瀬名 秀明『デカルトの密室』（新潮文庫）

「不気味の谷」や「チューリングテスト」という言葉を聞いて、ピンと来た人は時代の流れに乗っている人だと思います。これらの言葉は、ロボットやAI と深く関わっています。ただ、それらの用語を工学系の本を読んで理解するのは、文系の人間にはしんどいと思います。そこでお勧めなのがSF 小説です。本書では、ヒト型ロボットが実用化された近未来で起こる事件を通して、ロボットやAI とは何なのかを実感することができると思います。（森永）

４１．外山 滋比古『思考の整理学』（筑摩書房）

多くの大学生に読まれてきた名著である。自ら思考することの重要性を指摘し、その実践方法を著者の経験を踏まえて紹介されている。例えば、自分のエンジンで飛ぶ飛行機と、他の動力で引っ張られて飛行するグライダーの違いを挙げ、知識はあっても指示待ち行動しかできないグライダー型人間ではなく、自ら思考して行動できる飛行機型になることが重要だという。本書は自主的に行動を踏み出すためのきっかけになるであろう。（岡部）

４２．高根 正昭『創造の方法学』（講談社）

『創造の方法学』(講談社現代新書 1979 年 9 月 18 日)という本は非常に分かりやすく、問うための方法論、原因と結果の関係を解説している。問うことから始まり仮説の立て方、科学的な思考法、因果関係の吟味などについて、大学で学ぶ学生諸君にとって非常に優れた一冊である。（李）

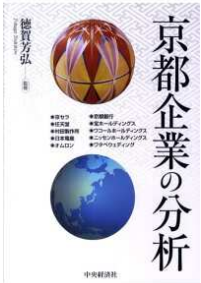
４３．高橋 昌一郎『理性の限界：不可能性・不確定性・不完全性』（講談社）

研究者から素人まで多様な人物の対話形式によって書かれており、社会科学、自然科学、形式科学の限界を明らかにしていく。我々が信じる合理的選択、科学的認識、論理的思考は、絶対的なものではないことが理解出来るとともに、読み手の限界も測ることができるおまけ付き。（上元）

４４．照屋 華子・岡田 恵子『ロジカル・シンキング』（東洋経済新報社）

MECE をはじめとする理論フレームワークを用いて経営課題をロジカルに考察したり表現したりすることに役立つ参考書。特に戦略論やマーケティングに関する例題や設問が多く用意されており、学部での学びに必要な思考力を培うことが出来る。（上元）

４５．徳賀 芳弘監修『京都企業の分析』（中央経済社）



京都大学経済学部・徳賀ゼミナールの３・４回生が２年の時間をかけて地元京都の企業の様々な視点から分析した成果をまとめた書物である。任天堂、京セラ、日本電産など京都を代表する企業の歴史的展開、現在の業界内での位置、経営戦略分析、財務分析および企業価値評価を通じて、それぞれの企業の特徴を浮き彫りにしたものであり、京都企業の躍進の手がかりを得るうえで非常に興味深い書籍である。（行待）

４６．徳賀 芳弘編著『京都企業 歴史と空間の産物』（中央経済社）

本書は推奨図書４５．を基礎に、京セラ、日本電産、村田製作所、オムロン、任天堂、宝ホールディングス、ワコールホールディングス、ワタベウェディング、京都銀行の９社を対象とした分析を行っている。対象期間は、経済成長が 40 年ぶりにマイナスに転じたリーマンショックの翌年 2009 年度から 2013 年度までである（推奨図書４５．より新しいデータを用いている。）推奨図書４５．と同様の手法でそれぞれの企業の特徴を浮き彫りとしている。（行待）

４７．トマス・オリヴァー『コカ・コーラの英断と誤算』（早川書房）

どんな企業も常に成功し続けるわけではありません。あのコカ・コーラも、かつて大きな失敗を経験しました。1980 年代に新しく発売した「ニュー・コーク」は、当初の期待ほど売れませんでした。それはなぜなのでしょうか。本書は、この疑問に対するいくつかのヒントを示してくれます。マーケティングの教科書の多くに紹介されるこの事例を、本書は読みやすく紹介しています。（涌田）

４８．戸山田 和久『新版 論文の教室：レポートから卒論まで』（NHK 出版）

論文の書き方、レポートの書き方について、面白い語り口調で解説してくれている。堅苦しい how-to モノではない点がお薦め。ただし、著者も述べているように、読んだだけでは論文・レポートは書けない。何回か挑戦する（書く）うちに、自然と身につく…それが論文・レポートです。（吉田）

４９．中間 大維『その商品は人を幸せにするか：ソーシャルプロダクツのすべて』（ファーストプレス）

ソーシャルプロダクトの普及推進に全生涯をかけた著者の想いが伝わってきます。これまでとは違った発想で「ソーシャルプロダクツ」を展開している 14 の企業や団体へのインタビュー調査をもとに、なぜ今人や地球にやさしい商品・サービスが求められるのか、そのようなソーシャルプロダクトがなぜ巨大な潜在市場を拓くことになるのかを説明している。ソーシャルプロダクトとは何かについて基本に戻って議論している箇所も必読です。（佐々木）

５０．中村圭介・石田光男『ホワイトカラーの仕事と成果：人事管理のフロンティア』（東洋経済新報社）

日本企業の人的資源管理の実態と変化が学べます。（三輪）

５１．中村 隆之『はじめての経済思想史：アダム・スミスから現代まで』（講談社）

本書の冒頭、著者は次のように主張する。「よいお金儲けをできるだけ促進し、悪いお金儲けをできるだけ抑制することで、社会を豊かにしようという学問、それが経済学である。」これは、経営学を学ぶうえでも大いに参考になる考え方だ。資本主義や市場経済のエッセンスをシンプルかつ深く理解できる、おすすめの一冊。（宮永）

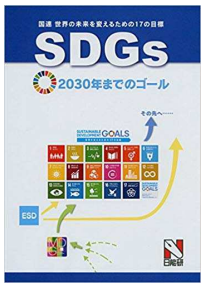
５２．永守 重信『情熱・熱意・執念の経営：すぐやる！必ずやる！出来るまでやる！』（PHP 研究所）

京都のみならず、今では日本を代表する企業となっている日本電産の創業者であり現会長である永守重信氏の経営哲学について記した一冊である。その内容は、日本電産の歴史からはじまり、人事、営業、技術、財務などといった経営全般について、永守氏の経験に基づき述べられている。非常に端的な文章で書かれており、アッサリと読み切ることのできる本なので、就職活動等で当該企業について知りたい人にもオススメです。（伊藤）

５３．中山 七里『総理にされた男』（宝島社）

総理のモノマネ芸人がある日突然拉致！　「影武者」として総理を務めることになった、売れない役者が「素人」ならではの青臭さを発揮し、党内政治や国会、官僚とのせめぎ合いに挑んでいく、事実のようなフィクション。税制や税金の使いみち、憲法、企業や経済との関わりなどもわかりやすく説明されます。自民党や民主党をモデルとした政党も登場し、原発事故後の日本の政治やメディアの問題点も学ぶことができます。（福冨）

５４．日能研教務部『SDGs：国連 世界の未来を変えるための 17 の目標 2030 年までのゴール』（みくに出版）



「最近、エスディージーズって聞くけどなんだろう？」と思っている学生のみなさんも多いのではないだろうか？　この本は、SDGs 超初心者に向けた入門書だ。中学受験をする児童でも興味が持てるように、とてもわかりやすく解説されている。実は授業をしていて４年生から「就職説明会で SDGs のことを聞くことが多いので、先に勉強しておけばよかった」という声が寄せられることも多い。最初の１歩にぜひ手に取ってみてほしい。（在間）

５５．日本内部監査協会『COSO 全社的リスクマネジメント』（同文舘出版）

ERM（Enterprise Risk Management）とは、企業を取り巻く環境が複雑化する現代において、企業に発生する可能性のあるあらゆるリスクについて、リスクに直面する組織内の個々の部署単位ではなく、組織全体の視点から統合的・包括的・戦略的に把握・評価・最適化し、企業価値の向上と企業の持続可能性を実現するためのリスク管理手法のことです。本書は米国 COSO 報告書『ERM』フレームワーク篇の翻訳書で、内部統制の観点から ERM について考える際の必読書です。（吉岡）

５６．野地 秩嘉『トヨタ物語：強さとは「自分で考え、動く現場」を育てることだ』（日経 BP）

現在では世界一の自動車メーカーと言われるトヨタであるが、創業時には、資本も技術も生産力も欧米メーカーに比べて大きく劣る弱小メーカーであった。本書は、創業者の豊田喜一郎とその仲間たちが、苦労を重ねながら、トヨタ生産方式を生み出し、人材を育て、技術を磨き、生産性を高め、高品質の自動車を世界に向けて売り、今日のトヨタの基盤を築いていく実話ストーリー。企業の成長発展プロセスを学ぶ良い材料である。（北原）

５７．ハジュン・チャン『経済学の 95%はただの常識にすぎない：ケンブリッジ式経済学ユーザーズガイド』（東洋経済新報社）

我々は空気のように経済に影響を受けている。しかし、経済学は難しすぎるという印象を消せない。それでいいのか。今、世界トップクラスの経済学者であるケンブリッジ大学のチャン教授は、これに疑問を提示、これまで常識だと思われた事柄について疑問を提示、本来皆が使えるべき、経済学のやさしい姿を明快に見せてくれる。*Economics：The User’s Guide*、いかに美しいタイトルなのか。空気を理解する指南書である。（具（承））

５８．濱口 桂一郎『若者と労働：「入社」の仕組みから解きほぐす』（中央公論新社）

ブラック企業、非正規雇用、早期離職など、若者の雇用を巡る環境は激変している。労働政策研究の第一人者である著者が、こうした問題がなぜ起こっているのか、丁寧に分かりやすく解説している。画一的な就職活動に意味を見出せず、就活に苦労している学生にはぜひ勧めたい１冊。就活ノウハウ本のような「自己分析のやり方」といった手軽な内容ではなく、何故働くのか？どう働くのか？その本質を考えるための本である。（松高）

５９．浜田 宏『その問題、数理モデルが解決します：社会を解き明かす数理モデル入門』（ベレ出版）

男女二人（新人社会人と大学で数学専攻する学生）の様々な社会の問題を数理・統計モデルで解決してく対話形式のストーリーがテンポよく面白い。日常の問題解決にモデルをもっと取り入れるべき、という筆者の意図が伝わってくる。数理モデルと言っても、文系の学生でも読めるよう丁寧に説明がなされているし、モデルもきちんと証明付きになっているので、これに興味持てば、R.L.ミーク&I.ブラッドリー「社会のなかの数理」やC.A.レイブ&J.G.マーチ「社会科学のためのモデル入門」へとステップアップするのも良い。（近藤）

６０．原田保秀『会計倫理の視座：規範的・教育的・実証的考察』（千倉書房）

会計不祥事が発生する度に「会計倫理」の必要性が叫ばれますが、そもそも会計倫理とは何か？についての定義は存在しません。論者がそれぞれの定義に基づいて持論を展開しているのが現状です。本書はこれまでの様々な主張を網羅的にかつ体系的に整理し、会計倫理教育にどう生かすのか、またその教育効果を測定するためにはどうすればよいのか、について意欲的に取り組んだ、日本で唯一無二の会計倫理に関する研究書です。（吉岡）

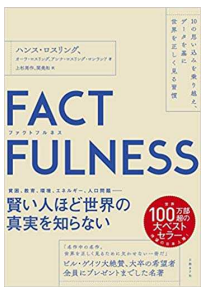
６１．原田 マハ『暗幕のゲルニカ』（新潮文庫）

ピカソの描いた「ゲルニカ」は有名だと思いますが、その作品が描かれた時代背景を知る人は少ないと思います。彼は何がきっかけでその作品を描き始め、どんな思いでそれを描き上げたのでしょうか？　本書は小説なのでフィクションですが、全くの虚構ではなく所々に真実が散りばめられています。美術作品に関する知識だけでなく、第二次世界大戦前後のスペイン史やヨーロッパ史も学べる一粒で二度おいしい作品となっています。（森永）

６２．原田 マハ『楽園のカンヴァス』（新潮文庫）

世界一下手な画家、アンリ・ルソーはご存じでしょうか？　確かに遠近法は無茶苦茶ですし、幼子が老婆に見えるなど、技術的には決して上手いとは言えません。しかし、彼が描く絵にはどこか不思議な魅力があります。本書では、過去と現在、真実と虚構の間を行き来して、彼が描いた一枚の作品「夢」を巡る物語が紡ぎ出されていきます。単に作品の解説を読むだけでは退屈かもしれませんが、物語として読めば楽しく学べると思います。（森永）

６３．ハンス・ロスリング他『FACTFULNESS（ファクトフルネス）：10 の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』（日経 BP）



先進国と途上国があって、途上国は貧しい暮らしをしている、と思っていないだろうか？　所得分布で４つに分類すると、国や地域が異なっても、同じ所得水準の人々の生活レベルは似ている。この本は、社会の見方についての「私たちの思い込み」に気づかせてくれる。数字やグラフの苦手な学生でも読みこなせる。さらにおススメの読み方は、この本の内容についても批判的に考えてみて、自分で調べて深めることだ。（在間）

６４．ビジャイ・ゴビンダラジャン、クリス・トリンブル『リバース・イノベーション』（ダイヤモンド社）

これまで先進国で事業活動をおこなっている企業は、先進国で製品開発を行い、一部手直しした安価な製品を開発途上国に投入してきた。その際、イノベーションは先進国に向けた製品開発で起こることを想定していた。しかしリバース・イノベーションでは、開発途上国の市場に向けた製品を生み出し、その製品をリバース(逆戻り)させ先進国に投入する。開発途上国が世界経済の主役となる時代に不可欠となる考え方を学ぶことができる。（大杉）

６５．日高 敏隆『動物と人間の世界認識：イリュージョンなしに世界は見えない』（筑摩書房）

私たちは同じ世界を見ているのでしょうか？私たちは同じ現実を認識しているのでしょうか？著者は「動物により知覚している世界は異なる」と主張します。例えば人間とダニではまったく違う世界を知覚しているのだと。だとすれば、あなたと私も認識している世界が違うのかもしれません。同じ景色を見ていると信じている二人がまったく違う世界を認識しているのかも知れません。本書は、あなたの常識を根本から覆す知的興奮の書です。（箕輪）

６６．兵頭 和花子『非営利組織における情報開示』（中央経済社）

会計（複式簿記）と言えば営利企業が行うものと思いがちですが、今日では国や地方自治体をはじめ、その他の非営利組織においても活用されています。著者の兵頭和花子氏（兵庫県立大学教授）は、先行する英国の事例を基に分析を行い、わが国における非営利組織の情報開示の在り方について検討しています。企業を見る新たな視点を与えてくれる著書です。（橋本）

６７．フェルナンド・カサード・カニェーケ 、スチュアート・L・ハート『BoP ビジネス 3.0：持続的成長のエコシステムをつくる』（英治出版）

BoP とは開発途上国における経済ピラミッドの底辺(Base of the Pyramid)を意味する。この言葉は 2002 年にスチュアート・L・ハートと C・K・プラハラードによって生み出された。BoP ビジネスでは貧困削減の実現と、BoP という新市場でのビジネスの両立を目指す。タイトルの BoP ビジネス 3.0 は、1.0 からの進化を示している。この進化の過程を理解することで、開発途上国における BoP ビジネスをどのように成功に導くことができるのか把握することができる。（大杉）

６８．藤沢 晃治『「分かりやすい表現」の技術：意図を正しく伝えるための 16 のルール』（講談社）

マネジメントには分業と調整が不可欠です。その際、「論理的に物事を考える」能力は重要ですが、考えるだけではダメで、その考えた結果を周囲に伝え、場合によっては賛意を得る必要があります。では、「自身が持つ考えを正しく周囲に伝える」にはどのようにすればいいでしょうか。この本には、そのために不可欠な「分かりやすい表現」の技術が整理されています。経営学部での学びを実践するのに欠かせない 1 冊です。（伊吹）

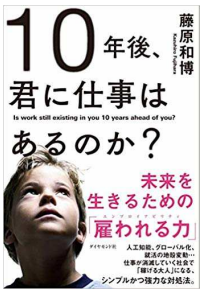
６９．藤田 香『SDGs と ESG 時代の生物多様性・自然資本経営』（日経 BP）

タイトルを見ると？？？となるかもしれないが、21 世紀の企業は、財務資本・物的資本・人的資本・知的資本に加えて、自然資本を経営に組み込むことが求められている。この本は、企業の自然環境や生態系に配慮した事業活動を紹介している。もちろん、その背景も説明している。事例が多く紹介されていて、全くこの分野に関心のない学生でも、面白く読むことができる。特に 2020 年の東京オリンピック向けた取り組みが興味深いと思う。（在間）

７０．藤本 隆宏『日本のもの造り哲学』（日本経済新聞出版社）

どんなに優れた製品を開発できても、それを生産できなければ「絵に描いた餅」になってしまう。高品質・低コストの製品を工場で安定的に生産する能力、それが「ものづくり力」である。ものづくり研究の第一人者である筆者が、日本企業の競争力の源泉である「ものづくり力」について、現場の視点から核心をとらえた力作である。製造業について学ぶ学生、メーカーに就職を希望する学生にはぜひ読んでほしい。（北原）

７１．藤原 和博『10 年後、君に仕事はあるのか？：未来を生きるための雇われる力』（ダイヤモンド社）



著者はリクルートを経て義務教育界初の中高の民間校長になった人である。２０世紀の「みんな一緒」の成長社会においてはすぐれた情報処理能力が求められ、一つの正解を導き出すことに重点が置かれたが、２１世紀の成熟社会においては、それぞれ一人一人」が情報を編集し、正解のない課題に対して納得解を出すことが求められる、そのためにブレインストーミングによる思考パターンを切り替えが必要だと述べている。（岡部）

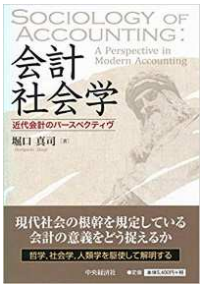
７２．古川 浩一・中里 宗敬・蜂谷 豊彦・今井 潤一『基礎からのコーポレート・ファイナンス』（中央経済社）

コーポレート・ファイナンスの歴史は企業の歴史とともに歩み、企業経営には欠かせない重要分野のひとつである。本書は、最新の高度な技術や最新の理論を取り上げるのではなく、その基になる概念や考え方を、できるだけわかりやすく解説することを意図している。したがって、この分野では不可欠な数式をできるだけ少なくなるようにし、各章末に、コーポレート・ファイナンスに関する話題や、やや専門的な数式の導出を補っている。（岩城）

７３．細谷 功『メタ思考トレーニング：発想力が飛躍的にアップする 34 問』（PHP 研究所）

メタ認知という言葉があります。メタとは「より高次の」という意味であり、メタ認知とは「自身の認知」を認知すること、つまりは自分自身を客観的に把握することを意味します。この本自体はメタ認知を活用して発想力を伸ばすことに主眼を置いていますが、「学習方法を学習する」や「理論やフレームワークの価値を知る」といった、大学生にとって必須の学びをどのように行うかについてのヒントも満載です。（伊吹）

７４．堀口 真司『会計社会学』（中央経済社）

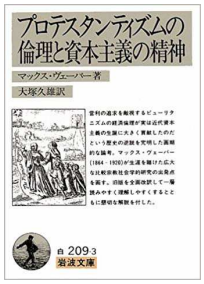


会計と言えばすぐに簿記と同一と思いこんではいませんか？簿記が会計の基底をなすことは間違いありませんが、現代では会計の認識対象（守備範囲）は拡大しつつあります。著者の堀口真司氏（神戸大学准教授）は、そのような会計の意義をどうとらえるかについて、哲学、社会学さらに人類学の視点から解明しようとしています。新しい会計の姿を学ぶことができる著書です。（橋本）

７５．本田 由紀『多元化する「能力」と日本社会：ハイパー・メリトクラシー化のなかで』（NTT 出版）

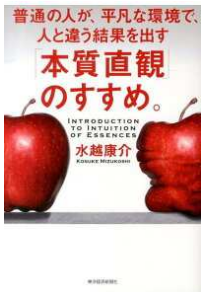
現代の日本社会では「〇〇力」が求められている。「コミュニケーション力」「課題解決力」・・・等々。しかし、その力はどのように身につけることができるのか、そもそも客観的に測定が可能なのか？得体のしれない「〇〇力」。にもかかわらず、全ての人が身につけるべきと大合唱されている。ハイパー・メリトクラシー（超業績主義）というキーワードを手がかりに〈「能力」の多元化〉という、このような社会状況の一端を描いている。（松高）

７６．マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店）



マックス・ウェーバー（著）／大塚久雄（訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫 1989 年 1 月 17 日）という本は優れた事例研究である。個々の企業家の経済的成功と宗教倫理との関係を検証したドイツの社会学者マックス・ウェーバーの著作である。（李）

７７．水越 康介『普通の人が、平凡な環境で、人と違う結果を出す「本質直観」のすすめ』（東洋経済新報社）

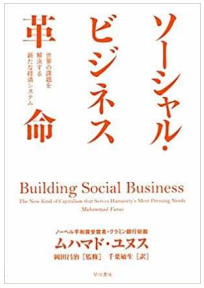


人が物事を考える時に、「本質を捉えた」と確信していることそれ自体を手がかりにして、むしろその根拠を疑い、問い直す作業を行うことでビジネスのアイデアや、なかでも特に優れたアイデアといえるビジネス・インサイトといったものを捉えることを試みる、近年のデータ重視の考え方に一石を投じる書である。（上元）

７８．水口 剛『ESG 投資：新しい資本主義のかたち』（日本経済新聞出版社）

投資の判断材料として財務情報が重要なことは言うまでもないが、環境（E：Environment）や社会（S：Social）への取り組みやコーポレート・ガバナンス（G：Governance）についても評価されている。これらの ESG は、これまで「非財務情報」と呼ばれていたが、近年は本来の指標に組み込み評価されるようになっている。ESG が企業価値に影響を及ぼすようになっているからだ。この本は ESG 投資の背景と実際をわかりやすく紹介している。（在間）

７９．ムハマド・ユヌス『ソーシャル・ビジネス革命』（早川書房）



著者のムハマド・ユヌスは、バングラデシュでグラミン銀行を創業し、2006 年にノーベル平和賞を受賞した。本書はグラミン銀行やグラミングループ組織の実践例を挙げつつ、ソーシャル・ビジネスの概念を提唱している。ソーシャル・ビジネスとは本書で示された 7 原則に沿い、人間の「利他心」に基づくビジネスである。CSR（企業の社会的責任）や、社会的企業、NPO とソーシャル・ビジネスがどのように異なるのか確かめてみるとよいだろう。（大杉）

８０．森 博嗣『人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか』（新潮社）

著者は作家としても有名であるが、新書もたくさん書いている。本書は、一言でいえば、「抽象思考」が重要であることを唱えている。「論理思考」を含めて、抽象的に物事を考えることがなぜ大切なのかを、平易な文章で解説してくれる。なぜ思考力を養う必要があるのか、うまくのみこめていない人には、ぜひ読んでみてほしい。（中野）

８１．山際 淳司『スローカーブを、もう一球』（角川文庫）

部活動やテレビ中継を通じて、スポーツは私たちにとって馴染み深いものでしょう。けれども「野球って何ですか」と問われたならば、どう答えればよいでしょうか。「野球は、企業経営のように様々なステークホルダーが戦略的意図をもって相手との競争に勝とうとする活動です」と言われるとどうでしょう。本書所収の「江夏の 21 球」は、スポーツを俯瞰して描写する楽しさが感じられます。（涌田）

８２．山口 周『劣化するオッサン社会の処方箋』（光文社新書）

「オッサン」とは、新しい価値観を拒み、過去の成功体験に執着し、目上の者に媚こび、目下の者を軽く見るなど、傍若無人な振る舞いをして自らを省みない人々のことをいうらしい。本書では、「50 歳を超えるいい年をしたオッサンが不祥事を起こす原因」「リーダーの質が落ちている原因」等を探るとともに、中堅・若手に向けた対抗策を説いている。（古村）

８３．山田 晴信『ハーバード・ケーススタディ方式で企業財務を学ぶ』（金融財政事情研究会）

本書では、実際の事例を用いながらファイナンス理論をやさしく解説し、企業財務（コーポレートファイナンス）の基本を実践的に理解することを目的として書かれたものである。著者がかつて学んだハーバード・ビジネス・スクールのケースメソッドを参考に日本の具体的な事例（ケース）を教材として用いており、損益計算書などの財務諸表を見たことのある人であれば、十分に理解できる内容となっている。（行待）

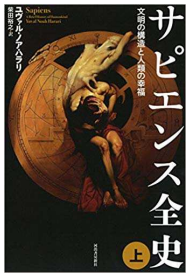
８４．由井常彦『『都鄙問答』と石門心学：近世の市場経済と日本の経済学・経営学』（冨山房インターナショナル）

『都鄙問答』を著し、「石門心学」を確立したのは、現在の亀岡市出身の石田梅岩である。梅岩は、士農工商との身分制度が定着していた１８世紀中盤に商業・商人の存在意義を強調し、「商人道」の必要性を提起した。梅岩の姿勢は、時代を超えて現代にも受け継がれており、いわゆる「日本的経営」の源流ないし基盤として位置づけられる。梅岩の事績はビジネスパーソンの「教養」というべきものであり、本書を通じて育むことを強く薦めたい。（松本）

８５．由井 常彦『清廉の経営：「都鄙問答」と現代』（日本経済新聞出版社）

江戸時代の中頃に石田梅岩によって始められた「石門心学」は江戸期を通じて商人の思想や行動に大きな影響を与えました。その「石門心学」の最も重要なテキストである『都鄙問答』は様々な面から商人のあり方を説いたもので、現代の我々にも示唆に富む内容を多く含んでいます。本書はその『都鄙問答』を分かりやすく紐解きながら、明治維新以後の経営思想の展開に与えた意義を論じており、日本の経営のあり方を考えさせてくれます。（柴）

８６．ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史（上・下）：文明の構造と人類の幸福』（河出書房新社）

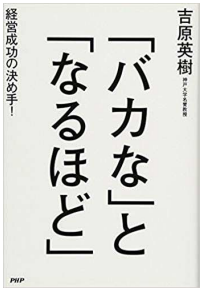


人類の歴史を扱った類書は多いけれど、わかりやすい口調なので、これはなかなか面白い。その理由は、人類におよんだ劇的な変化を「〇〇革命」というキーワードで記述している点にあるのでは…と思います。果たして、われわれ人類が築き上げてきた「文明」が、幸福に結実したのか…それは読んでみないとわからない？！（吉田）

８７．ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス（上）（下）：テクノロジーとサピエンスの未来』（河出書房新社）

Y. ハラリの『ホモサピエンス』に続く超大作。全世界 45 ヶ国で発刊・翻訳され 500 万部が売れた話題書。人間が国家、貨幣、企業、宗教等といった社会システムの誕生と機能、変化、その本質は何かについて究明しようとしたのが『サピエンス』だとすれば、本書はサピエンスの続きで、人間の創った多様な技術や制度、社会システムなどが今後のような未来に向かっていくのかについて答えを探そうとする書物である。（具（承））

８８．吉原 英樹『「バカな」と「なるほど」：経営成功の決め手！』（PHP 研究所）



なぜあの会社の事業（ビジネス）は成功したのか？成功している会社にはなにか秘策があるのか？こういった経営に関する素朴な疑問に、筆者は、最初にその事業のあらましを聞くと出来っこないやあり得ない、そんな「バカな」と思うかもしれないが、深く考えてみるとそこには誰もが「なるほど」と納得する論理や仕組みがあるという。将来起業したいと思っている学生にもオススメの一冊。（近藤）

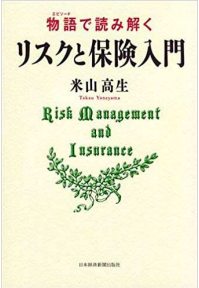
８９．米倉 誠一郎『イノベーターたちの日本史：近代日本の創造的対応』（東洋経済新報社）

幕末から明治維新にかけて、欧米列強に比べて経済力も軍事力も大きく劣る日本が、植民地化されることなく、独立を維持し、その後の発展の礎を築いていった時代に、国家を率いていた若きリーダーたちが、いかに斬新な発想で改革を断行していったかを、史実に基づいてまとめた秀作。新たな国家建設に邁進したイノベーターの思考と行動から、現代にも通じる使命感・戦略的発想・実行力・リーダーシップを学ぶことができる。（北原）

９０．米盛 裕二『アブダクション：仮説と発見の論理』（勁草書房）

論理的な思考について、演繹的な方法と帰納的な方法はよく知られているが、第三の方法として、「アブダクション」がある。この方法は、科学的な探究過程において、演繹や帰納を用いる前の、仮説の形成に有効であると言われている。いわば、着想のための方法論である。「論理思考」で学んだことをベースに、さらに発展的に学びたい人に読んでほしい。（中野）

９１．米山 高生『物語（エピソード）で読み解くリスクと保険入門』（日本経済新聞出版社）



保険を、リスクマネジメントの中心的な分野であると位置付け、その基礎的概念と知識を、興味を引く物語をとおして平易に論じている。とくに、近代日本の保険産業の変遷を分析しており、経営史の視点からも価値あるものである。明治から昭和にかけての保険証券やポスター、景品などの写真を数多く紹介しており、臨場感を持ち楽しみながら読み進むことができる。（諏澤）

９２．米山 高生『リスクと保険の基礎理論』（同文舘出版）

最新のリスクマネジメント論および保険経済学の基礎的な理論を、網羅している入門書である。リスクの定義と種類、その計量化、また、リスクマネジメントの全体的な体系とそのなかでの保険の位置づけ、リスクマネジメントのプロセスを、学ぶことができる。各章末には練習問題が収録されているが、巻末に詳しい解説が付されており、さらに理解を深めることができる。（諏澤）

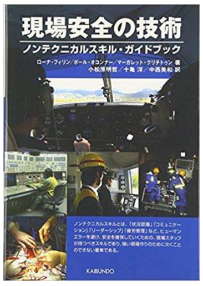
９３．リチャード・ホーフスタッター『改革の時代：農民神話からニューディールへ』（みすず書房）

社会は人間によって作られたのだから、変えることができる。そんな素朴な信念で突き進んだ時代があった。19 世紀末葉のポピュリズムの時代、20 世紀初頭の革新主義期、そして 1930 年代のニューディールである。アメリカ歴史学の泰斗ホーフスタッターが、時代の特徴をいきいきと捉えてみせる。歴史学の醍醐味ここにあり。1956 年、ピューリッツァー賞受賞作品。（上野）

９４．リンダ・グラットン『ワーク・シフト』（プレジデント社）

これからの社会のキャリアを考えるうえで参考になります。（三輪）

９５．ローナ・フィリン 、ポール・オコンナー、マーガレット・クリチトゥン『現場安全の技術：ノンテクニカルスキル・ガイドブック』（海文堂出版）



ミス防止・事故防止は、経営管理の課題とも言えます。アルバイト等の業務のなかで発生する身近なミスの原因は何なのか、再発防止はどうすればよいのかを考えるうえでも、数々のヒントを得られるでしょう。（赤岡）

９６．渡部 昇一『知的生活の方法』（講談社）

今となってはもう古い本ですが、高校生、大学学部生のころ、この本を読んで将来こういう生活ができれば良いなと憧れていました。別に研究者にならなくても、読書を通じて、自分の趣味に合った、静かだけど充実した生活を送る術が書かれており、若い人にお勧めしたいと思います。（篠原）

以上